

## 日本在住イギリス英語母語話者の単語レベルにおける発音

ボルドーモンテニュー大学 / 早稲田大学 大戸雄太郎

### 1. はじめに

近年、学習者の多様化が進み、学習目的も多様化している。日本語の発音指導については学習者からのニーズが高いが、カリキュラムの問題や音声の専門性などから、国内外を問わず、十分な発音指導が行われていないのが現状である（戸田 2008）。特にヨーロッパでは、アジアと比べて、1. 学習者が日本語母語話者と接触する場面は限られており、インプットを得られる機会が少ない、2. 同じヨーロッパ内の言語と日本語の間には言語系統的な距離があり、日本語に対する親和性が低い、などの理由から、発音を課題としている学習者が見られ、音声教育は発展途上であると言える。

イギリスでも、状況は同様であることが予想される。英語を母語とする学習者の日本語の発音には一定の特徴があるが、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語などの地域差が生み出す発音の違いについては考慮されていないことが多い。そこで、筆者はイギリス英語を母語とする学習者に着目し、彼らのための音声教育の可能性を探りたいと考えた。

### 2. 先行研究

#### 2.1 英語母語話者の発音の特徴

第二言語習得において、発音は母語転移を受けやすいとされる（Tarone 1979）。英語を母語とする日本語学習者には、英語の母語転移が起こることが考えられる。そのため、英語にない日本語の拍リズムやアクセントが難しいとされている。

まず、拍リズムについて、戸田（1997）は、オーストラリアの英語を母語とする初級の学習者において、長音・促音の持続時間に問題があると述べている。続いて、鹿島（1999）は、アメリカの学習者において、初級レベルでは曖昧母音や二重母音化のほかに、短母音の長母音化あるいは長母音の短母音化などが問題になると述べている。また、小熊（2001）は、複数の地域出身の英語母語話者において、単語内の長音の位置によって長音の習得順序が異なり、語頭→語末→語中の順に、長音を習得すると述べている。そして、特殊拍ではないが、鶴谷（2004）は、オーストラリアの学習者において、典型的な誤用として拗音の直後に母音の挿入を行う傾向があると述べており、短母音の長音化が関係していると考えられる。

次に、アクセントについて、鹿島（1999）は、平板型アクセントを中心に、アクセント型が正確に実現されていない問題を挙げている。高橋（2014）は、アメリカ英語母語話者はアクセントの知識と生成が結びついておらず、それぞれの単語のアクセントを正しいアクセントで読み上げられていないとした上で、全体的に中高型の過剰使用が見られたことを示している。

以上のように、英語母語話者の発音習得には一定の特徴があり、特定の母音、拗音・特殊拍や、アクセントなどの発音習得に課題が残っていると考えられ、単語レベルの発音でも難しいことが分かる。しかし、上記の研究対象者は、アメリカやオーストラリアの学習者が中心であり、イギリスの学習者の日本語の発音に関する研究は管見の限り見当たらない。

なお、イギリスの学習者の発音学習経験については、大戸（2018）が学習者インタビューからイギリスと日本それぞれの学習経験についてまとめているが、学習者の実際の発音との関係については明らかになっていない。

## 2.2 中間言語の音声規則

学習者の言語は、母語でも第二言語でもない学習者特有の言語体系を持ち、変化し続けるとされる、中間言語理論が提唱されている (Selinker 1972、長友 1993、迫田 2002)。この中間言語理論に基づいて、母語に関わらず音声規則が存在するという報告がなされている。助川 (1999) は特殊拍を含む重音節が高いピッチで発音されることを報告しており、ブラジル人日本語学習者にも当てはまるが、その特徴は母語転移では説明ができないと述べている。加えて、皆川・前川・桐谷 (2002) は、英語母語話者と韓国語母語話者がともに、アクセント型と長音の語中位置が、母音の長短の同定に影響することを明らかにしている。これらは学習者特有の言語体系である可能性がある上、日本語のアクセント型と特殊拍には何らかの関係があるのではないかと考える。

したがって、イギリス英語母語話者の発音の特徴を考える際には、母語からの予測に加えて、中間言語の音声規則からの予測が可能である。一方で、個々の学習者がどのような日本語のインターアクションを行ったか、また、音声教育を経験してきたか、などといった個人要因によって、発音の特徴にも差が生じることについては注意しなければならない。

## 3. 研究目的

本研究の目的は、イギリス英語母語話者 (以下、ES) の単語レベルにおける発音の特徴について、先行研究である他地域の英語母語話者の特徴や、中間言語の音声規則などと比較記述することで、知見を深めることである。期待される成果として、ES の発音の特徴から、彼らに対してどのような音声教育が必要であることを示唆することで、イギリスの日本語音声教育に提言することができると考える。

研究目的を達成するための RQ は以下 3 点である。

RQ1: 他地域の英語母語話者の発音の特徴は、本研究の ES にどの程度当てはまるか。

RQ2: 中間言語の発音の特徴は、本研究の ES にどの程度当てはまるか。

RQ3: 本研究の ES には、先行研究にない特徴がどの程度見られるか。

なお、本研究は、イギリスや日本で日本語学習経験があり、多様なインプットを得て発音により意識が向いていると考えられる、日本在住の ES を調査対象者とした。そこで、個人要因にも着目すべく、質問紙調査やフォローアップインタビューなどで読み上げた単語の理解、発音学習経験なども確認し、実際の発音との関連性についても取り上げる。

## 4. 調査方法

本調査は、半年以上日本に滞在しているイギリス英語母語話者 (以下 ES) 5 名を対象に、2017 年に行った。日本語のレベルは中級から上級であり、日本語でインタビューが可能であった。以下、調査

表 1: 調査協力者 (ES) の情報

	性別	年齢	母方言	生育地	日本語 学習期間
ES1	女性	21	南イングランド方言	イギリス バーミンガム	4年程度
ES2	女性	20	南イングランド方言	イギリス ロンドン	7年程度
ES3	女性	23	南イングランド方言	イギリス ブリストル	4年程度
ES4	男性	23	南イングランド方言	イギリス ロンドン	2年程度
ES5	女性	21	南イングランド方言	イギリス ウィンチェスター	3年程度



## 5. 調査結果

調査結果を音声項目ごとに詳述する。それぞれ、直音・拗音の特徴、特殊拍の特徴、アクセントの特徴、の順に音声項目を分け、学習者の特徴を記載する。なお、実際の判定結果を記載する際には、(ES が読み上げた単語→判定者が聞き取った音声)の順に記載する。強調は筆者が付したものである。また、インタビューの結果から明らかになった、個々の発音学習経験(大学やそれ以外での経験の有無と、その内容)を表3に示す。そのほか、質問紙・インタビューの結果のうち本研究に関連性が高いと思われる部分を適宜記載する。

表3: 発音学習経験

	イギリスの大学	日本の大学	その他
ES1	あり: 語アクセントの練習	なし	
ES2	あり: 語アクセントの練習	あり: 発音授業で全般的に学習	
ES3	なし	あり: 朗読など	
ES4	なし	あり: 発音授業で全般的に学習	
ES5	なし	なし	動画サイトで学習

### 5.1 直音・拗音

本調査は、中級から上級の学習者を対象としたため、単音の発音にはそれほど問題はないと想定し、すべての直音・拗音を網羅する調査語とはなっていない。しかしながら、単なるミスイクとも言い切れない例も見られたため、ESごとに特徴を記述し、困難な点を予測したい。

ES1は、単音の発音が正確であり、2件のみ異なる音に聞き取られた。「ほ」が「よ」に聞き取られる(「ほっぺ」→「よっぺ」)、「わ」の後に「お」の母音が挿入される(「でんわ」→「でんわお」)、以上の2件である。特に「ほっぺ」については、「ほ」の[h]<sup>3</sup>を[j]と発音した可能性があるが、単に読み間違いの可能性もある。

ES2も同様に、1件のみ異なる音に聞き取られた。「し」が「せ」に聞き取られている(「しちやく」→「せちやく」)。ES2は、「しちやく」の発音を少し難しかったと捉えている。質問紙・インタビューから、多くの単語は相手に伝わるため、発音も難しくないと考えているが、「しちやく」は「緊張してたら言いにくい」と述べている。特に、短い「し」の音と、すぐに「ちゃ」の音を言う組み合わせが母語の英語になく、発音しづらいと捉えていることが分かった。

ES3も、2件のみ異なる音に聞き取られた。1個の単語ではあるが「りょ」が「ろ」に、「く」が「け」に聞き取られている(「どりょく」→「どろけ」)。インタビューで、ES3は「りょ」が一番苦手な発音だと思うと語っており、以前勉強したスペイン語の「ro」(震え音)の音が出てきてしまうと述べている。筆者が聴取したところ、震え音ではなかったが、確かに「りょ」ではなく「ろ」と発音されていた。それに伴い、後続の「く」も緊張した発音で子音が強調され、日本語母語話者には「け」と聞き取られてしまったと考えられる。

ES4は、異なる音に聞き取られた件数が他のESに比べるとわずかに多く、4件見られた。「け」が「き」に聞き取られる(「けっか」→「きっか」)、「め」が「み」に聞き取られる(「めがね」→「みがね」)、「み」が「む」に聞き取られる(「みつつ」→「むつつ」)、「りょ」が「よ」に聞き取られる(「どりょく」→「どよく」)、以上の4件である。まず、母音/i/, /e/を日本語としては曖昧に発音している可能性があり、特定の音環境で異なる音に聞き取られた可能性がある。また、「りょ」についてはES3と同様に難しいようであり、「努力」の難しい部分をインタビューで聞いた際に、「『り』と小さい『ゃ・ゅ・ょ』の組み合わせが難しい」と答えている。

ES5は、全ての直音・拗音を正確に発音していた。インタビューでは、ES3、ES4のように「どりょく」の「りょ」が難しいと述べていたが、日本語母語話者に異なる音で聞き取られた音はなかった。

## 5.2 特殊拍

特殊拍は、長音・促音・撥音の三種類に分類される。特殊拍で起こりやすい誤りとしては、特殊拍部分が認められない「脱落」と、特殊拍でない部分が特殊拍のように聞こえてしまう「挿入」が考えられる。本調査は、特殊拍の音環境ごとに調査語を選定したため、60語中40語はいずれかの特殊拍を含んでいる。それゆえ、特に拍感覚のない学習者の場合、誤りも非常に多く表れると考えられる。しかし、本調査は中上級の学習者を対象としているためか、誤りは数件ずつに留まった。また、長音・促音・撥音に均一に誤りが見られたわけではなく、長音はES全員に、促音と撥音はESの一部に誤りが見られた。表4に、ESごとの特殊拍の誤生成の種類（不自然だった、誤挿入があった、脱落があった）と件数を示す。誤生成の具体的な点については、以下順を追って、学習者ごとに特徴を記載するが、アクセント型と特殊拍の関係も調べるべく、筆者が判定したアクセント型も併記する。

表4： 特殊拍の誤生成の種類と件数

	長音			促音		撥音	誤答 合計
	不自然	挿入	脱落	挿入	脱落	脱落	
ES1	3	3	0	0	2	1	9
ES2	0	1	0	0	0	0	1
ES3	3	5	0	0	0	0	8
ES4	1	1	0	8	0	1	11
ES5	0	6	1	0	0	0	7
ES合計	7	16	1	8	2	2	36

### 5.2.1 長音

ES1は、脱落は見られなかったが、3件の挿入（「どりよく」→「どおりよく」〈頭高型〉、「どくしょ」→「どくしょう」〈尾高型〉、「しょうゆ」→「しょうゆう」〈頭高型〉）が見られた。なお、ES1はインタビューで、「ゆき」と「ゆうき」のような長音のミニマルペアで意味の誤解があった経験を述べている。また、3件の長音が不自然であると判定された（「よてい」→「よて一[ɛ]」〈中高型〉、「とちょう」→「とちよ一[ɔ]」〈尾高型〉、「ちゅうい」→「ちゅ一[œ]い」〈頭高型〉）。このうち、「よてい」と「とちょう」は、英語の母音で置き換えたものが日本語母語話者には不自然に聞き取られたと考えられる。なお、「よてい」と同じ長母音を語末に含む「いせい」、同じ「ちょう」を含む「ちょうさ」では自然に聞き取られている。同じ音に対する判定結果の違いは、ESの個々の単語の理解度等ともあまり関係がないようである。特定の音環境によるものなのか、一種の言い間違いなのかは定かではない。

ES2は、1件の挿入（「おかし」→「おかしい」〈中高型、「し」にアクセント核））が見られた。ES2は特殊拍に対する意識が高く、促音や撥音、その他の長音での脱落・挿入は見られなかった。「おかし」の「し」のみ母音が伸びてしまった理由として、形容詞「おかしい」を想起したことが考えられる（なお、読み上げたアクセント型と、「おかしい」のアクセント型は同じである）。なお、インタビューから、ES2は日本に来てから大学で発音授業を受講した経験があることが分かっている。

ES3は、脱落は見られなかったが、5件の挿入（「しゃもじ」→「しゃもじい」〈中高型、「も」にアクセント核〉、「おかし」→「おかしい」〈中高型、「か」にアクセント核〉、「ゆうき」→「ゆうきい」〈頭高型〉、「どうろ」→「どうろお」〈頭高型〉、「さいしょ」→「さいしょう」〈頭高型〉）が見られ、いずれも挿入位置は語末であった。音の長さを適切に保つのが難しいことは、ES3自身も気づいており、インタビューでも、長い音を「伸ばし過ぎたくない」と語っている。また、異なる音で判定された「どうろ」や「さいしょ」について、インタビューで「どうろお」や「さいしょう」になってしまうと発言しているが、意識した上で適切な長さに留めて発音することはまだ難しいようである。また、3件の長音が不自然であると判定された（「すうじ」→「す一[œ]じ」〈頭高型〉、「しょうぎ」→「しょ一[ɔ]ぎ」〈頭高型〉、「さとう」→「さとお[ɔ]」〈頭高型〉）。このうち、「しょ

うぎ」と「さとう」は同じ[ɔ]の母音に聞こえたため、日本語の/o/の音を[o]ではなく[ɔ]で代用している可能性がある。

ES4 は、1 件の挿入（「しょうゆ」→「しょうゆー」〈頭高型〉）が見られ、1 件が不自然だと判定された（「いせい」→「いせえ[e]」〈平板型〉）。ES4 はインタビューにて、ES2 と同様に日本に来てから大学で発音授業を受講したことが分かっており、日本語には「ビル」「ビール」などの長音のミニマルペアで意味が変わる単語があるという認識を基に、音の長さを守ることが重要であると述べている。長音の挿入が他の ES に比べ少ないのは、音の長さを強く意識していることを裏付けていると言える。「しょうゆ」が「しょうゆー」と聞き取られてしまった点は、日本語母語話者が評価の際に「英語の『show you』に聞こえる」と発言しており、英語を想起させた可能性がある。また、「いせい」の長音が[e]となったのは、ES1 と同じ特徴であり、日本語の/e/の音を[e]ではなく[e]で代用している可能性がある。

ES5 は、1 件の脱落（「ゆうべ」→「ゆべー」〈尾高型〉）と、6 件の挿入（「ゆうべ」→「ゆべー」〈尾高型〉、「ほっぺ」→「ほっぺー」〈尾高型〉、「さいしゅ」→「さいしゅう」〈平板型〉、「どうろ」→「どうろう」〈平板型〉、「おっと」→「おっとう」〈尾高型〉、「さいしょ」→「さいしゅう」〈平板型〉）が見られた。挿入位置はいずれも語末であった。ES5 は、先述の直音・拗音や後述の促音、撥音で異なって聞き取られた音がなく、指摘されたのは長音のみであった。また、長音の脱落が見られたのも ES5 のみである。

なお、アクセントが置かれた位置と、長音の脱落・挿入が起きた箇所には関連性は見られなかった。

### 5.2.2 促音

ES1 は、2 件の脱落（「こっち」→「こち」〈頭高型〉、「みつつ」→「みつ」〈頭高型〉）が見られ、挿入は見られなかった。いずれの単語も、よく使う単語であると判断しているため、言い慣れた単語で速く読み上げた結果、促音部分が日本語母語話者に伝わらなくなってしまった可能性がある。一方で、同じようによく使う単語であると判断した「けっか」の促音部分は聞き取られている。「こっち」と「みつつ」が「けっか」と異なる点としては、後続子音が「ち」「つ」という破擦音であることだが、破裂音である「か」の時と難易度が変わるかについては今回の調査では不明である。

ES4 は、5 名の ES の中で最も多い、8 件の挿入が見られた（「うちゅう」→「うっちゅう」〈頭高型〉、「ぎじゅつ」→「ぎっじゅつつ」〈中高型〉、「こしょう」→「こっしょう」〈尾高型〉、「さとう」→「さっとう」〈中高型〉、「しちやく」→「しっちやく」〈尾高型〉、「どくしょ」→「どっくしょ」〈頭高型〉）。質問紙を参照すると、これらの単語の中で、意味が分かった上でたまに使うと判断したものは「さとう（砂糖）」のみであり、それ以外の単語は全て、意味が分からず使わないと判断している。それゆえ、いずれの単語も納得できるまで読んでもらってはいるが、一文字ずつ文字を追うように読んでしまった場合、日本語母語話者には促音のように聞こえた可能性がある。特に「ぎじゅつ」や「しちやく」ではそれぞれ 2 件ずつ挿入されており顕著であるが、いずれも拗音を含む単語であるため、ES4 にとって難しかったと考えられる。

### 5.2.3 撥音

ES1 は、1 件の脱落（「みんな」→「みな」〈頭高型〉）が見られたが、挿入は見られなかった。語中に撥音を含む単語は、「みんな」も含めていずれもよく使う単語であると判断している。また、撥音の後続子音が同じ「n」である「おんな」の撥音は発音できている。しかし、「みんな」は「みなさん」のように「みな」という単語としても使うので、それらが混同している可能性が考えられる。

ES4 は、1 件の脱落（「みんな」→「みな」〈頭高型〉）が見られたが、挿入は見られなかった。ES1 と同様に、「みんな」をよく使う単語であると判断しているため、「みな」と混同が考えられる。

### 5.3 アクセント

日本語のアクセント（東京方言）は、頭高型、中高型、尾高型、平板型の4種類の型がある。調査語は3拍の単語としたため、中高型のアクセント核の位置は2拍目のみとなる。また、音環境を揃えたため、型ごとの単語の数は型によって異なっている。詳しくは2.の表2を参照されたい。

以下の表5は、日本語母語話者の判定結果を基に、各型、ESごとに、正答数と正答率をまとめたものである。なお、直音・拗音・特殊拍の判定と比べて、日本語母語話者に曖昧で分かりにくいと判定されたものも多かった。理由としては、ESが曖昧に発音したことと、日本語母語話者でもアクセントを判定する能力に限界があったことの両方が関係していると考えられる。曖昧であると判定された場合は誤生成とし、正答数を計算して単語数を表記した。また、正答率/単語数を正答率としてパーセンテージで表記し、50%を下回った場合には網掛けを付した。

表5： アクセント型別正答数・正答率（日本語母語話者による判定）

	頭高型(22個)		中高型(8個)		尾高型(8個)		平板型(22個)		合計(60個)	
	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率
ES1	11	50.0%	6	75.0%	1	12.5%	2	9.1%	20	33.3%
ES2	16	72.7%	4	50.0%	5	62.5%	8	36.4%	33	55.0%
ES3	18	81.8%	3	37.5%	2	25.0%	3	13.6%	26	43.3%
ES4	8	36.4%	4	50.0%	2	25.0%	8	36.4%	22	36.7%
ES5	6	27.3%	5	62.5%	7	87.5%	15	68.2%	33	55.0%
平均	11.8	53.6%	4.4	55.0%	3.4	42.5%	7.2	32.7%	26.8	44.7%

概観するに、どのESもいずれかの型の正答率が50%を下回っている。正答率が比較的高いES2とES5以外は、50%を下回る型が2つ以上見られ、型ごとの言い分けができていないことが予想される。

また、日本語母語話者の判定結果とは別に、個々の単語がどのアクセント型に近いかを筆者が判定したところ、多くの単語を1つのアクセント型で読み上げるESも見られた。それゆえ、5名のアクセント生成には、アクセント型や音環境の違い以上に、個人差による影響が大きいと考えられる。以下、1名ずつアクセント生成の特徴を記述し、筆者のアクセント型判定の結果についても併せて記載する。

#### 5.3.1 ES1のアクセント

筆者が判定した、ES1の読み上げたアクセント型を表6に示す。枠内にはその音環境・型で読み上げられた語の数を、枠の括弧内にその単語が正しいアクセント型で読み上げられた場合の数を表記している。加えて、2.2で述べた重音節（特に、長音・促音・撥音の含まれる箇所）とアクセントの関連性を検証するため、重音節の語中位置に着目し、アクセントを付与しやすいと考えられる音環境に網

表6： ES1の読み上げたアクセント型（筆者による判定）

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
直音	3(2)	4(2)	1	0
拗音（語頭）	1(1)	1	2	0
拗音（語中）	3(2)	1	0	0
拗音（語末）	3(1)	0	1	0
長音（語中）	6(2)	0	0	0
長音（語末）	1	3(1)	2	0
拗長音（語中）	4(2)	0	0	0
拗長音（語末）	1	3(2)	2	0
促音（語中）	5(1)	0	1	0
撥音（語中）	5(2)	0	1	0
撥音（語末）	3(2)	1(1)	2	0
合計	35(15)	13(6)	12	0

掛けを付した。なお、このアクセント型の判定は、筆者による判定であるため、日本語母語話者の判定結果と異なる場合があることは留意しておかれたい<sup>5</sup>（以下、表7以降も同様）。

ES1は、表6のとおり、全60個中35個の単語を頭高型で読み上げており、多くの語を頭高型で読む傾向があった。中でも、語中、すなわち2拍目に特殊拍（重音節）を含む単語は、22個中20個を頭高型で読み上げており、重音節にアクセント核を置く傾向があるとみられる。そのため、語末、すなわち3拍目に特殊拍を含む単語は、頭高型以外で読み上げることが多く、頭高型アクセントの単語も頭高型以外で読んでいたことから、頭高型の単語でアクセントが正しいと日本語母語話者に判定されたのは、22個中11個（50.0%）に留まっている。

一方で、中高型の単語は8個中6個（75.0%）が正しいアクセントであると判定されている。8個の中には、語末に拗長音（「けしょう」など）を含む単語があり、中高型で発音しやすかったと考えられる。しかし、筆者の判定では、語末に拗長音を含む他の単語を、必ずしも中高型で発音しているわけではなかった。そのため、上記の正答数には、インプットなどが影響していると考えられる。根拠として、8個の単語のうち、質問紙でよく使用すると回答した4個の単語はいずれも正しいアクセントであると判定されていたことが挙げられる。

尾高型の単語は、8個中1個（12.5%）、「おんな」のみアクセントが正しいと判定されている。「おんな」は、よく使う単語であると回答しているため、自然と正しいアクセントで読み上げられた可能性がある。しかし、同じ尾高型の「みんな」「ことば」などもよく使う単語であると回答しているが、尾高型では読み上げていなかった。すなわち、ES1によるアクセント生成の傾向は、正しいアクセントの知識によるものであるとは考えにくいことが分かる。

また、平板型の単語は22個中2個（9.1%）のみアクセントが正しいと判定されているが、筆者の判定ではいずれの単語も平板型には聞き取れなかった。ES1は、単語に後続するキャリアセンテンスである「と読みます」の助詞「と」をすべて低く読んでいたことから、平板型で正しいアクセントであるとは判定されにくかったようである。

なお、ES1はインタビューにて、アクセントを気にした経験がなかったと語っている。イギリスの大学で、「橋」「箸」などの、アクセントで意味が変わる単語を練習したが、教師に「地域によってイントネーションが全然違うから、日本で自然に人に聞いて学ぶ方がいい」と言われ、練習方法は教えてもらわなかったそうである。実際、アクセントの読み上げに、インプットの影響で正しいアクセント型で読み上げられたと考えられる部分も数点見られた。しかし、母語の特徴も残っているため、その認知が意識的に行われているとは考えにくい。

### 5.3.2 ES2のアクセント

ES2は、表5のとおり、22個中16個（72.7%）と比較的高い割合で、頭高型の単語が正しいアクセントで判定されていた。また、中高型の単語は、8個中4個（50.0%）が、尾高型の単語は、8個中5個（62.5%）が正しいアクセントで聞き取られていた。質問紙の結果を見ると、意味が分かり、よく使い、発音が易しいと判定した単語が17個あったが、うち14個が正しいアクセントで判定されていたため、アクセントを理解して、単語を使用している可能性がある。ES2のアクセント型を表7に示す。

しかし、平板型の単語は正答率が比較的低く、22個中8個（36.4%）であった。表7のとおり、筆者の判定では、ES1と同様にキャリアセンテンス「と読みます」を低く読む傾向があり、いずれの単語も平板型とは判定できなかった。一方で、ES2が尾高型のように読み上げた単語が多かったため、その一部が日本語母語話者に平板型であると聞き取られ、多少正答率が上がったようである。

その他、語中に長音、拗長音、撥音が含まれる単語は頭高型で、語末に長音、拗長音が含まれる単語は頭高型以外の型で読まれる傾向が見られ、ES1と同様に重音節にアクセントを置く傾向が見られた。しかし、促音が含まれる単語は頭高型、尾高型、平板型にそれぞれほぼ言い分けられており、全体の正答数も60個中33個（55.0%）と50%を超えていることから、比較的アクセントの理解と実現ができていけると言えるだろう。

さらに、インタビューでは、発音の難しさについて聞いた際、日本での発音授業の受講経験として、手を使ってアクセントの高低を表現する方法や、ドラマを見て俳優の発音をシャドーイングする練習

表 7: ES2 の読み上げたアクセント型 (筆者による判定)

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
直音	2(2)	2(2)	4(2)	0
拗音 (語頭)	3(2)	0	1	0
拗音 (語中)	4(2)	0	0	0
拗音 (語末)	1(1)	0	3	0
長音 (語中)	4(2)	0	2(1)	0
長音 (語末)	1	2(1)	3	0
拗長音 (語中)	4(2)	0	0	0
拗長音 (語末)	0	3(2)	3	0
促音 (語中)	2(2)	0	4(2)	0
撥音 (語中)	5(2)	0	1(1)	0
撥音 (語末)	2	2(1)	2	0
合計	28(15)	8(5)	24(6)	0

方法などを語ってくれた。「ほとんどの言葉は、ピッチアクセントの自信がない」と発言しており、「アクセントを認識してはいるが、個々の語のアクセントまでは覚えていない」という意味であると考えられるものの、アクセントの正答率は比較的高く、5.2.1 で述べたとおり特殊拍に対する意識も高い。イギリス・日本両方での発音授業の経験から、発音に対しての意識化が進んでいると考えることが可能である。

### 5.3.3 ES3 のアクセント

表 8: ES3 の読み上げたアクセント型 (筆者による判定)

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
直音	3(2)	5(2)	0	0
拗音 (語頭)	2	2	0	0
拗音 (語中)	3(2)	1	0	0
拗音 (語末)	4(2)	0	0	0
長音 (語中)	5(2)	0	1	0
長音 (語末)	2	3(1)	1	0
拗長音 (語中)	3(2)	0	1	0
拗長音 (語末)	1	2(1)	2	1(1)
促音 (語中)	5(2)	0	1(1)	0
撥音 (語中)	5(2)	0	1(1)	0
撥音 (語末)	5(2)	1	0	0
合計	38(14)	14(4)	7(2)	1(1)

ES3 も、ES1 と同様に、頭高型の単語で読み上げたものが多く、表 8 のとおり、筆者の判定では 60 個中 38 個の単語を頭高型で読み上げており、ES の中で最も多かった。また、平板型で読み上げた単語は 2 個のみであった。その結果、頭高型の単語は 22 個中 18 個 (81.8%) が正しいアクセントであると判定されたが、中高型は 8 個中 3 個 (37.5%)、尾高型は 8 個中 2 個 (25.0%)、平板型は 22 個中 3 個 (13.6%) と、他の型の正答率は 50%を下回った。

筆者の判定に基づき、実際に読み上げられたアクセント型を見ると、尾高型と平板型の弁別ができていなかった。また、音環境別に見ると、語中に特殊拍を含む単語が、他の ES と同様に、頭高型になっていることが多かった。一方で、他の ES には見られない特徴であるが、語末に長音や撥音を含む単語も、頭高型で読み上げている。ES1 のように、重音節にアクセントを無意識においているのだとすれば、語末に長音や撥音を含む単語では頭高型では発音されにくくなるはずである。それゆえ、ES3 のアクセント生成には、重音節の有無のみではなく、別の要因も関与している可能性が高い。

各単語の発音の難しさを確認したインタビューでは、アクセントが難しかったこと、その難しさの

基準をもとに質問紙で発音の難しさを判定したことについて答えてくれた。その際、「日本」「二本」というアクセントによって意味が変わる例を述べた後、「ことば」という単語はアクセントを変えても意味が変わらないので安心できるが、「みかん」という単語は意味が変わるかもしれないと感じたので自信がなくなった、と説明した。また、「たぶん間違えていると思う」と前置きした上で、「地震」を読む際には、「自身」ではなく「地震」であることを伝えるため、「地」の部分強調して読む、すなわち頭高型で読むようにしていると語った。興味深いストラテジーではあるが、実際には「じしん」は平板型であるため、アクセントとしては誤りとなる。

ES3 は、似たような音環境で、同じアクセント型で読み上げているため、重音節の有無が関わっていることは否定できない。しかし、その調査語が他に意味の異なる語を有していたか、伝えるためにどの部分を強調して読むか、などの要因で読み上げるアクセント型を変えるストラテジーを有しており、それがアクセント生成に影響したとも言える。

また、イギリスの大学ではアクセントについての勉強はせず、授業などもなかったと述べた上で、発音は留学時に授業で少しだけ勉強したが、間違っている先生から指摘されることはなかったと、これまで発音を学習したり、修正したりする経験が乏しかったことについて触れている。インタビューに際しては、非常に日本語が堪能であると個人的に感じたが、「ネイティブのペラペラさになりたい」と本人の到達目標は未だに高い。「もうちょっと正しい発音やアクセントを勉強しないとだめかな」とも述べているが、学習方法をあまり知らず、どのように学習すれば良いか分からない様子であった。

#### 5.3.4 ES4 のアクセント

アクセント型ごとの正答数を見ると、頭高型の単語は、22 個中 8 個 (36.4%)、中高型は 8 個中 4 個 (50.0%)、尾高型は 8 個中 2 個 (25.0%)、平板型は 22 個中 8 個 (36.4%) と、全て 50% 以下であった。

ES4 は、唯一の男性協力者であった上、音の高低をあまり変えずに話す特徴があったため、読み上げの際には音の高低の起伏が少なく、アクセントが判定しにくかったと考えられる。また、他の ES に比べ、学習期間が 2 年程度 (正確には 2 年と半年程度と予想される) と短かった上、アンケートでは意味が分からない、使わないと判断した単語が比較的多く、60 個中 33 個が分からない単語であった。当然、分からない単語は全て使わないと判断しており、他の ES に比べて言い慣れていない単語が多かったと考えられる。

表 9: ES4 の読み上げたアクセント型 (筆者による判定)

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
直音	2(1)	3(1)	2(1)	1(1)
拗音 (語頭)	1	3	0	0
拗音 (語中)	0	3	1	0
拗音 (語末)	3(2)	0	1	0
長音 (語中)	6(2)	0	0	0
長音 (語末)	0	2(2)	3	1
拗長音 (語中)	4(2)	0	0	0
拗長音 (語末)	2(2)	1(1)	3	0
促音 (語中)	6(2)	0	0	0
撥音 (語中)	6(2)	0	0	0
撥音 (語末)	1	1	2	2(1)
合計	31(13)	13(4)	12(1)	4(2)

表 9 のとおり、筆者の判定では、語中に特殊拍を含む単語では頭高型に、語末に長音や撥音を含む単語では頭高型以外の型に、それぞれ読み上げられる傾向が見られた。これまでの ES と同様、アクセントの生成に重音節の有無が影響している可能性が高い。ES4 の知らなかった単語のみに絞ってもほぼ同じ結果が得られたため、アクセントは語ごとの理解の有無を問わず、本人にとって読み上げやす

いアクセント型で読み上げられた可能性が高い。

インタビューの分析から、日本で発音授業の受講経験があり、音の長さに意識が向いていることが分かったのは 5.2.1 のとおりである。アクセントについては、直接「音の高さが重要である」とは言及しなかったものの、発音が上手でない人の発音を示す際に、ES4 が極端に単語の一部分を強く読むようにしていたことが印象的であった。それゆえ、単語ごとのアクセントを高低ではなく強弱で捉えている学習者の発音を下手であると認識している、すなわち高低が重要であると捉えている可能性がある。発音授業で他に学習したことを尋ねた際にも、本研究の対象外ではあったが、疑問文イントネーションの文末の音の高低についても言及していた。そのため、音の高低があることについては認知しているようである。ES4 は長音への意識化によって、長短の弁別を実現している一方で、アクセントはそれほど正答率が高いとは言えないが、語彙の理解が他の ES と同程度になった場合、アクセントの生成がどのように変化するか、追跡していきたいと考える。

### 5.3.5 ES5 のアクセント

ES5 は、これまでの 4 名の ES とは明らかに異なる特徴を有していた。まず、表 10 のとおり、筆者の判定では、明確に頭高型で読み上げたのは全 60 個の単語のうち 3 個だけであった。また、調査語に（後続するキャリアセンテンス「と読みます」の「と」の部分の高低をはっきり単語によって分けており、尾高型と平板型の区別がついていた。また、「これは～と読みます」というキャリアセンテンス全体を、一つの文でなめらかに読んでおり、「への字型」と言われる日本語らしいイントネーションを実現していた。読み上げた単語が正答であるかどうかにかかわらず、発音が上手である印象を受けた。

表 10： ES5 の読み上げたアクセント型（筆者による判定）

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
直音	0	2(2)	2(1)	4(1)
拗音（語頭）	0	1	1	2(2)
拗音（語中）	1(1)	0	3	0
拗音（語末）	0	0	2	2(1)
長音（語中）	0	0	3(2)	3(2)
長音（語末）	2	0	4	0
拗長音（語中）	0	0	4	0
拗長音（語末）	0	2(2)	4	0
促音（語中）	0	0	5(1)	1
撥音（語中）	0	0	0	6(2)
撥音（語末）	0	0	3	3
合計	3(1)	5(4)	31(4)	21(8)

アクセント型ごとの正答数を見ると、頭高型の単語が、22 個中 6 個（27.3%）と最も少なく、中高型の単語は 8 個中 5 個（62.5%）、尾高型は 8 個中 7 個（87.5%）、平板型は 22 個中 15 個（68.2%）と、特に尾高型と平板型の正答数が多くなったことが分かる。筆者の判定と一部違いも見られたが、これは ES5 が ES4 のように、高低の起伏が激しくなかったため、どちらにも聞き取ることができたためであると考えられる。それを踏まえても、全体的に頭高型に読み上げることが多く、尾高型や平板型の正答数が少なかった ES1、ES2、ES3 らとは明らかに異なっている。

インタビューにて、アクセントなどの音の高低についての話題を取り上げると、まず、「しょうゆ」の発音の難しい点を聞いた時に、「イントネーションと emphasis がどこにあるのかよく分からない」、という発言があった。さらに、イギリスの大学で発音の授業はなかったと前置きした上で、動画サイトで日本語のイントネーションについて学んだと語った。具体的には、「への字型」のような文単位でのイントネーションの知識を有しているようであり、加えて「じゃない」に疑問と否定のどちらの意味があることなど、イントネーションによる意味の違いを認識しているようだった。動画サイト以外

にも、日本語での発表をする際に、日本人に原稿を読んでもらい、それを模倣して練習した経験などを語ってくれ、それらの経験からイントネーションに意識が向いていたのだらうと考えられる。

一方で、「雨」「飴」のようにアクセントで意味の変わる単語を例に出し、アクセントの知識を確認すると、「日本語でそういうことがある」のは知っているが、勉強していないから分からないと答えており、アクセントの知識は有していないようだった。しかし、上記のようにイントネーションを意識していたため、調査文を「への字型」イントネーションで読み上げた結果、多くの単語が尾高型や平板型のように聞き取られたと考えられる。それゆえ、他の ES とは異なる特徴を有する結果になったのである。

無論、頭高型での生成があまりできていないなど、まだ課題が残っていると言える。しかしながら、発音について意識し、自ら動画サイトや日本人の友人などのリソースを有効活用することで、発音授業などを直接受講した経験がなくとも、発音に変化が見られることが分かった。

## 6. 結果のまとめと考察

以上、直音・拗音、特殊拍、アクセントの音声項目別に分け、結果を記述した。本章では、研究目的を達成するため、調査結果をまとめ考察する。

### 6.1 結果のまとめ

直音・拗音生成の特徴は以下の3点にまとめられる。

1. 「ほ」が異なって聞き取られる
  - ・「ほ」が「よ」に聞き取られる (ES1、「ほっぺ」→「よっぺ」)
2. 「りよ」が異なって聞き取られる
  - ・「りよ」が「ろ」に聞き取られる (ES3、「どりょく」→「どろけ」)
  - ・「りよ」が「よ」に聞き取られる (ES4、「どりょく」→「どよく」)
3. 母音が異なって聞き取られる
  - ・「わ」の後に「お」の母音が挿入される (ES1、「でんわ」→「でんわお」)
  - ・「し」が「せ」に聞き取られる (ES2、「しちやく」→「せちやく」)
  - ・「く」が「け」に聞き取られる (ES3、「どりょく」→「どろけ」)
  - ・「け」が「き」に聞き取られる (ES4、「けっか」→「きっか」)
  - ・「め」が「み」に聞き取られる (ES4、「めがね」→「みがね」)
  - ・「み」が「む」に聞き取られる (ES4、「みつつ」→「むつつ」)

次に、特殊拍生成の特徴は、以下の6点にまとめられる。

1. 長音が不自然な音として聞き取られる (7件)
  - ・ ES1 3件 (「よてい」→「よてー[ɛ]」、「とちょう」→「とちよー[ɔ]」、「ちゅうい」→「ちゅー[œ]い」)
  - ・ ES3 3件 (「すうじ」→「すー[œ]じ」、「しょうぎ」→「しょー[ɔ]ぎ」、「さとう」→「さとお[ɔ]」)
  - ・ ES4 1件 (「いせい」→「いせえ[ɛ]」)
2. 長音が挿入されたように聞き取られる (16件)
  - ・ ES1 3件 (「どりょく」→「どおりょく」、「どくしょ」→「どくしょう」、「しょうゆ」→「しょうゆう」)

- ・ ES2 1件（「おかし」→「おかしい」）
  - ・ ES3 5件（「しゃもじ」→「しゃもじい」、「おかし」→「おかしい」、「ゆうき」→「ゆうきい」、「どうろ」→「どうろお」、「さいしょ」→「さいしょう」）
  - ・ ES4 1件（「しょうゆ」→「しょうゆー」）
  - ・ ES5 6件（「ゆうべ」→「ゆべー」、「ほっぺ」→「ほっぺー」、「さいしゅ」→「さいしゅう」、「どうろ」→「どうろう」、「おっと」→「おっとう」、「さいしょ」→「さいしょう」）
3. 促音が挿入されたように聞き取られる（8件）
- ・ ES4（「うちゅう」→「うちゅう」、「ぎじゅつ」→「ぎじゅつつ」、「こしょう」→「こっしょう」、「さとう」→「さっとう」、「しちやく」→「しちやくつ」、「どくしょ」→「どっくしょ」）
4. 長音が脱落したように聞き取られる（1件）
- ・ ES5（「ゆうべ」→「ゆべー」）
5. 促音が脱落したように聞き取られる（2件）
- ・ ES1（「こっち」→「こち」、「みつつ」→「みつ」）
6. 撥音が脱落したように聞き取られる（2件）
- ・ ES1、ES4（「みんな」→「みな」）

そして、アクセント生成の特徴を記述する。ある程度共通性が浮かび上がった点として、以下の5点に集約される。

1. 全体的に頭高型で読み上げる傾向がある（ES1、ES3）
2. 語中に長音、拗長音、撥音を含む単語を頭高型で読み上げる傾向がある（ES1、ES2、ES3、ES4）
3. 語中に促音を含む単語を頭高型で読み上げる傾向がある（ES1、ES3、ES4）
4. 語末に長音を含む単語を頭高型以外の型で読み上げる傾向がある（ES1、ES2、ES4）
5. 尾高型と平板型の弁別ができていない（ES1、ES2、ES3）

これらの結果について、次節にて考察する。

## 6.2 考察

上記の結果のまとめを基に、研究目的であるESの発音の特徴について、先行研究と比較検討し考察する。なお、本研究のRQは以下のとおりである。

RQ1： 他地域の英語母語話者の発音の特徴は、本研究のESにどの程度当てはまるか。

RQ2： 中間言語の発音の特徴は、本研究のESにどの程度当てはまるか。

RQ3： 本研究のESには、先行研究にない特徴がどの程度見られるか。

### 6.2.1 他地域の英語母語話者の特徴との比較

先行研究に挙げられている他地域の英語母語話者の発音の特徴は、主に以下の6点である。

1. 母音の曖昧母音化（鹿島 1999）
2. 短母音の長母音化、長母音の短母音化（鹿島 1999）
3. 単語内の位置によって長音の習得順序が異なり、語頭→語末→語中の順に進む（小熊 2001）
4. 拗音の直後に母音を挿入し、長母音化する（鶴谷 2004）
5. 平板型を始めとする、アクセント型が言い分けられない（鹿島 1999）

## 6. 中高型の過剰使用 (高橋 2014)

まず、1.について、母音が異なって聞き取られた例に当てはまる可能性がある。今回誤って聞き取られた母音は/i/、/e/が多いが、特に/e/は曖昧母音化によって[e]が[ə]の発音となり、日本語母語話者に誤って聞き取られたと考えられる。また、長音部分の/u/の音である[u]が[ə]のような、日本語として不自然な音に聞き取られてしまった原因についても、母音部分が曖昧母音化したことによる問題であると考えられる。これは、短音の時には聞き取られなくとも、音が伸びて長音になった時に母音の違いが目立ってしまったことによる問題であるとみられる。

また、2.と同様の問題である長音の挿入は件数が多く、全 ES に見られたため、短音の長さを保って発音することが難しいことが伺える。3.については、本研究の結果においても、長音の挿入箇所が語頭よりも語末に多かったため、母音長の制御ができていないという点で、語頭よりも語末長音の方が、習得が進んでいないと考えられる。4.の拗音の直後に母音を挿入する問題についても、ES1の「どくしょ」→「どくしょう」、「そして、5.のアクセント型が言い分けられない問題についても、本研究の結果からも顕著であった。

一方で、6.の中高型の過剰使用は、本研究の ES においては見られなかった。

### 6.2.2 中間言語の特徴との比較

先行研究に挙げられている中間言語の音声規則は以下の2点である。

7. 特殊拍を含む重音節が高いピッチで発音される (助川 1999)

8. アクセント型と長音の語中位置が、母音の長短の同定に影響する (皆川・前川・桐谷 2002)

まず、7.について、重音節である特殊拍にアクセント核を置くことで、本来のアクセント型でないアクセントで読み上げられた例が多かったため、中間言語理論から説明できると言える。一方で、この見解によると、語末に撥音を置く単語も同様に頭高型以外の型になりやすいと言えるが、そのような傾向を示したのは ES4 のみであり、ES3 のようにむしろ頭高型で読み上げた学習者も見られた。そのため、主に促音や長音の時にアクセント核が置かれやすいと考えられる。

8.については、本研究では、長音が挿入・脱落した位置と、アクセント核が置かれた位置にはあまり関係は見られなかった。しかし、8.は知覚についての先行研究であり、本研究は生成を扱ったものであるため、そもそも知覚と生成で同じ問題が起きるとは言えないと考えられる。

これまでの比較によって、アメリカ、オーストラリアといった他地域の英語母語話者の特徴や、中間言語理論による説明と一致している点も見られ、これらの先行研究の結果が、イギリス英語母語話者にも応用できる可能性を示していると言える。

### 6.2.3 本研究の ES の独自の音声的特徴

しかし、先行研究には見られず、本研究の結果のみが示している特徴もいくつか明らかになった。

まず、6.のように、中高型の過剰使用が指摘されていたが、そういった特徴を示した ES は見られず、むしろ、ES1、ES3 のように、頭高型が過剰使用される傾向を示した ES が見られた。

加えて、単音の問題として、特に「りょ」の発音が難しいことが判定やインタビューから挙げられ、母音が異なって聞き取られる例が複数見受けられた。拗音の中でも、「りょ」は母語の英語にない音の組み合わせであり、同じ「りゃ」行である「りゃ」や「りゅ」についても難しいか検討する余地がある。

また、長音を発音する際に、一部の母音が日本語にない[ɛ] や、[ɔ]、[œ]に聞こえたケースが見られたことについても、先行研究での言及は見られなかった。これらは ES が短音で発音した際にはあまり意識されないものの、長音になると母音が際立ち、不自然であるという指摘につながったと考えられる。これらの問題は、イギリス英語母語話者だけの特徴と言えるのか、他地域にも見られるものなのかは明らかでない。

さらに、インタビューからは ES3 が独自のアクセントの読み上げストラテジーを有している可能性があることが分かっている。そして、ES5 は、への字型イントネーションを学習した経験から、尾高

型・平板型を弁別するようになっていた。これらは、個人要因が無視できないことを示している。

このように、本研究で明らかになった ES の発音の特徴の中には、他地域の英語母語話者を対象とした先行研究には、見当たらない結果も見られた。断定はできないが、以上の結果がイギリス英語母語話者独自の特徴である可能性もあるため、同一条件の調査を他地域の英語母語話者も対象に実施し、結果を比較することで、より詳細に特徴を明らかにできることが期待される。ひいては、イギリス英語母語話者独自の特徴に着目した、音声教育が望まれる。

なお、本調査では理解度や使用度などを質問紙によって確認し、アクセント生成の結果と照らし合わせた。理解度や使用度と、アクセントの正答率にはそれほど関連性がないことが明らかになった。この点については、有意味語を調査語とし、質問紙やインタビューの結果を踏まえた意義であると言え、ES のアクセントの認知が進んでいないことを示していると考えられるが、これについては稿を改めたい。

## 7. 音声教育への応用

### 7.1 音声項目ごとの指導方法

本項では、単音、特殊拍、アクセントといった音声項目ごとに、本研究の結果と、そこから考えられる音声指導方法について詳述する。

音声教育において、単音は初級で扱われることが多いが、本研究結果からは、中上級になっても「りょ」などの単音に誤りが残っている例が見られた。インタビューでも学習者が難しい発音であると認識しており、それらについて発音授業で詳しく学習することができたと述べた ES は見られなかった。したがって、単音は初級だけでなく、中級、上級であっても発音指導を設けても良いものと考えられる。また、長音を読み上げる際に母音が不自然であると判定された例が見られ、母音の音質の問題があることも分かった。発音練習の際に、「あ」「い」「う」と母音を短く発音すると、教師も音質の違いに気づきにくい。母音を伸ばして発音したり、長音の含まれる単語を用いたりすることで、より違いが分かりやすく、自然な発音に近づけると考えられる。

また、特殊拍については、特に長音の挿入において、日本における発音授業の受講経験の有無によって誤生成数が増えているため、発音指導の成果が表れやすい部分であると考えられる。特殊拍の指導はリズム指導の一環としてよく行われているが、リズムを意識しながら(2拍ごとに手を叩くなど)、特殊拍を含む平易な文を読むことで、リズム感覚を養うことができると考える。特に、長音の挿入が行われないよう、話速に注意する必要がある。

そして、日本滞在中の中上級の学習者で、日本語の多量のインプットを受けている学習者であっても、高低アクセントそのものを認識していない例が見られたため、高低アクセントを知識として指導する必要があると考える。本研究ではアクセントを体系的に学習した学習者は見られなかったため、どのような方法が効果的かは明らかでないが、音の高低を音響解析などで視覚的に示す方法や、音の高低に合わせて手を動かす方法などが、高低アクセントの指導法として考えられる。それから、語アクセントを正しく理解し、言い分けられるように、知覚・生成の両方で、4つの型を区別する練習が必要である。特に、尾高型と平板型の違いには後続の助詞の音の高低が関わってくるため、助詞を含む形での練習が必要である。加えて、特殊拍に着目し、語中に長音があるが平板型の単語(「数字」など)、語末に長音があるが頭高型の単語(「宇宙」など)のように、重音節にアクセント核のない例を練習する必要があると考える。それらの知識を学習者があらかじめ有した状態で、アクセントに意識を向けて適切なインプットを得られれば、個々の単語のアクセントの習得が進むと考える。

以上のように、今回の調査で明らかになった点から ES の発音の特徴を示唆でき、それを基に指導を行うことができると考える。学習者の発音は母語のみではなく中間言語理論や個人要因などが影響していることは事実である。とはいえ全般的な指導のみではなく、彼らの母語や地域差に着目した指導が必要である。例として、清濁の問題は、他の母語話者には度々見られることがあるが、ES においてはあまり生じ得ない。これは、母語である英語にも有声無声の対立があり、日本語の清濁に置き換え

やすい（正の転移）からであると考えられる。したがって、母語の特徴や、母語話者間に共通してみられる発音の特徴を理解し、指導を行っていくことは有意義であると考えられる。

## 7.2 音声指導の重要性

音声は目に見えないため、文字情報に比べて記録・評価がしづらく、取り立てて意識しづらい分野である。だからこそ、意識をしないまましていると、学習者の中で癖が残ってしまい、修正が難しくなってしまうことも十分考えられる（化石化）。特に、日本語をゼロから始める学習者にとっては、指導すべき項目も多くカリキュラムに余裕がないのは事実である。しかし、発音指導は、ほんの短い時間で、少しの意識づけから始めることができるため、初期段階から指導することが重要であると考えられる。また、初級で発音学習経験のあった学習者でも、中上級になってなお自信がないという発言があったように、発音習得には時間を要するため、初級から継続的な指導が必要であると考えられる。

本研究の結果から、日本滞在中の学習者であっても発音上の問題が残っており、特にアクセントの認知が進んでいないという事実が明らかになった。ヨーロッパの大学で日本語を教える講師の中には、「日本に留学すれば発音が上達する」と考え、母国で十分な発音指導を行わないまま、日本留学をもって学習者の発音の上達を期待するような考えがあることが報告されている（林 2009）。確かに、日本で多様なインプットを受けることで、発音は上達しやすいとは考えられる。しかし、日本在住のESであっても、発音には課題が残っているため、来日前、来日後を問わず、日本語の発音指導を受ける機会を増やすべきであると考えられる。

しかし、発音授業を経験したES2とES4は、とりわけ特殊拍の生成において非常になめらかな発音を実現していた。加えて、来日前から発音を意識化し、動画サイトや日本人の友人をリソースとして自発的に発音を学習していたES5は、なめらかなイントネーションを実現させ、アクセントの生成において他のESとは異なる結果を示していた。これらの事実は、発音学習に一定の効果があることを示唆している。

日本語を用いるコミュニケーションにおいては、発音以外にも、ジェスチャーや表情などのように、相手に言いたいことを伝えるための戦略は多く存在する。しかし、発音のせいで言いたいことが伝わらない経験をした学習者は多い（大戸 2018）。彼らのコミュニケーションの助けとなるためにも、発音習得は重要であり、彼らのための音声教育が求められている。

## 8. おわりに

本論文では、日本在住のイギリス英語母語話者を対象に、単語レベルにおける発音の特徴について、先行研究と比較記述することで、知見を深めることを目的とした。研究結果から、先行研究と一致する点、一致しない点の両方が明らかになり、他地域の英語母語話者や中間言語理論の音声的特徴が、イギリス英語母語話者にも応用できる可能性を示した。それとともに、母語や地域差に着目した音声教育の重要性を示唆した。

今後の課題として、イギリス英語母語話者をはじめとする日本語学習者に、各学習者の音声の特徴を考慮しつつ、音声項目別に適切な指導法を選んだうえで教育実践を行い、音声教育によって学習者の発音がどのように変化するのかを明らかにしたいと考える。

---

### 注

<sup>1</sup> 調査語の「しけん（試験）」はアクセント辞典などで「中高型」であるとされているが、周囲の東京方言話者、あるいは本調査の評価者はいずれも「頭高型」で読み上げている上、学習者にとっても馴染みのある単語であるため、「頭高型」の単語として扱った。

<sup>2</sup> 共通問題は、評価対象となった全データのうち1割を、ランダムに並び替えて作成した問題である。評価は本調査と同じ評価項目に沿って行われた。

<sup>3</sup> 本論文では、発音記号は[ ]を、音素記号は//を用いて表す。

<sup>4</sup> 日本語母語話者が不自然だと判定した長音は、主に母音の問題であったため、音声学の知識を持たない日本語母語話者には表記することが不可能であった。そのため、「よてー」「いせえ」などのような表記にしたことを確認している。後に、筆者が聞き取って母音部分の音声記号を加えた。なお、前の音から長音にかけて母音が変化した例は見られなかった。

<sup>5</sup> 特に尾高型と平板型についてはその差が顕著である（ES1 は筆者判定では平板型で読み上げた単語が見られなかったが、日本語母語話者の判定では正しいアクセントである平板型で読み上げたとされる単語が2個あるなど）が、実際の会話場面では筆者のようにアクセントを厳密に判定するわけではなく、伝わる発音という観点から言えば、日本語母語話者に正しいと判定されたのであれば、それほど誤用だと認識される発音ではないことから、日本語母語話者の判定結果を正誤の基準とした。

## 参考文献

- 大戸雄太郎 (2018) 「日本語学習者は日本語の発音をどのように学習してきたのか」, 『早稲田日本語教育学』 25号, 61-70.
- 小熊利江 (2001) 「日本語学習者の長音の産出に関する習得研究—長音位置の要因による難易度と習得順序—」, 『日本語教育』 109号, 110-117.
- 鹿島央 (1999) 「英語話者の日本語音声」, 『音声研究』 3巻3号, 43-51.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』, アルク.
- 助川泰彦 (1999) 「ブラジル人日本語学習者の2モーラ語と3モーラ語のピッチ実現」, 『音声研究』 3巻3号, 13-25.
- 高橋恵理子 (2014) 「英語母語話者における日本語単語アクセントの習得—知識と生成の関係から—」, 『広島大学日本語教育研究』 24号, 1-8.
- 鶴谷千春 (2004) 「拗音習得課程に見られる第一、第二言語の音韻構造の影響」, 『Second Language』 3号, 27-47.
- 戸田貴子 (1997) 「日本語学習者による促音・長音生成のストラテジー」, 『第二言語としての日本語の習得研究』 1号, 157-197.
- 戸田貴子編 (2008) 『日本語教育と音声』, くろしお出版.
- 長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究—概観—」, 『日本語教育』 81号, 1-18.
- 林明子 (2009) 「日本語の韻律的特徴と知覚—ドイツ人日本語学習者へのリズム・イントネーション教育を視野に—」, 『紀要.言語・文学・文化』 104 (225)号, 1-32.
- 平井明代編 (2017) 『教育・心理系研究のためのデータ分析入門:理論と実践から学ぶ SPSS 活用法』 第2版, 東京図書.
- 皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋 (2002) 「日本語話者の長/短母音の同定におけるピッチ型と音声位置の効果」, 『音声研究』 6巻2号, 88-97.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-231.
- Tarone, E. (1979) Interlanguage as chameleon. *Language Learning*, 29 (1), 181-191.